12 月 8 日の説教要旨　　「主の働き人として歩む」　　南 豊牧師

イザヤ書　59章12節～20節

ホームレス状態になった人にとって一番苦しいのは、食べられないことでも眠れないことでもありません。自分は存在しているのに誰も自分の存在を気にも留めず、関わろうともせず「向こう側を」通り過ぎる。隣人不在の状態だそうです。しかし、この隣人不在の状態はホームレス状態になった人だけの問題ではありません。2000 年 5 月に起こった佐賀バスジャック事件で逮捕された当時 17 歳の少年の母がある大学教授に宛てた手紙には「色々なところに相談しましたが、動いてくださる先生は一人もいらっしゃらない」と書かれていたそうです。この手紙について奥田牧師は次のように書いています。「手紙を読んだ日の衝撃を忘れない。息子の心の闇を心配しつつ、さらに深いこの世の闇に絶望している母親に教会はあの日何をしていたのか、私はどこにいたのか」と。【奥田 知志『月刊いのちのことば』2010 年 07 月号. わが父の家には住処(すみか)おほし北九州・絆の創造の現場から 第 10 回 イエスはあほや】

今朝与えられたイザヤ書 59 章が書かれたと考えられる時代から約 50 年前、新バビロニア帝国はユダ王国を滅ぼしユダ王国の主だった人々を首都バビロンに強制移住させました。それから約 50 年後、イスラエルの人々は故郷に戻ることを許されます。しかし、彼らを待ち受けていたのは絶望の日々でした。

１節以下には、悪を行うものが栄え、善を行うものが苦しむ社会に失望し、希望を見失い、力を失ってうなだれる中で神様は本当にいるのだろうか、私たちを見捨てられたのではないかという思いに支配されている姿が記されています。私は、この嘆きが、現代の私たちの嘆きに重なるように思うのです。「神がいるなら、なぜ戦争は続くのか、なぜ、神は苦しむ人々の声に沈黙するのか」。世の人々のその答えに私たちは言葉を失いそうになります。

しかし、私たちは絶望しなくても良いと今日の聖書を通して預言者イザヤは語るのです。イザヤは主なる神ご自身がこの世の闇を晴らすために来られると告げるのです。だから、この世界の深い闇はいつか晴れる。その希望を私たちは持ち続けたいのです。そして、先だって進まれる主に続き、私たちもまた、希望を持って現実の課題に関わるものでありたいのです。『あなたも行って隣人になりなさい』と言われたイエスに従い、主の働き人としてご一緒に歩みましょう。